

# COVID-19感染拡大下における【学士】老年看護学実習の取り組み：臨地実習と学内実習によるハイブリッド型実習の実践と課題

著者	猪飼 やす子, 川上 千春, 土田 奈津美, 青池 桃子, 大澤 友起子, 坂内 ひろみ, 宗像 弘美, 柳井田 恭子
雑誌名	聖路加国際大学紀要
巻	8
ページ	70-75
発行年	2022-03-08
URL	<a href="http://doi.org/10.34414/00016573">http://doi.org/10.34414/00016573</a>



短 報

# COVID-19感染拡大下における【学士】老年看護学実習の取り組み —臨地実習と学内実習によるハイブリッド型実習の実践と課題—

猪飼やす子<sup>1)</sup> 川上 千春<sup>1)</sup> 土田奈津美<sup>2)</sup> 青池 桃子<sup>2)</sup> 大澤友起子<sup>2)</sup>  
坂内ひろみ<sup>2)</sup> 宗像 弘美<sup>2)</sup> 柳井田恭子<sup>2)</sup>

## Practical Training for Gerontological Nursing in the Accelerated Bachelor of Science in Nursing Program amid COVID-19 —Practice and Challenges Involving Hybrid On-Site Training and On-Campus Training—

Yasuko IGAI<sup>1)</sup> Chiharu KAWAKAMI<sup>1)</sup> Natsumi TSUCHIDA<sup>2)</sup> Momoko AOIKE<sup>2)</sup>  
Yukiko OSAWA<sup>2)</sup> Hiromi BANNAI<sup>2)</sup> Hiromi MUNAKATA<sup>2)</sup> Kyoko YANAIDA<sup>2)</sup>

### [Abstract]

In the 2017 academic year, St. Luke's International University established an accelerated bachelor of science in nursing program to admit transfer students as third-year undergraduate students. This transfer program teaches "adult and gerontological nursing," a combination of adult nursing and gerontological nursing. During the second term of the 2020 academic year, the training hospital was able to accept trainees for practical training in gerontological nursing under certain conditions, such as conditions related to the time spent in the hospital ward, even amid the COVID-19 pandemic. Thus, the training hospital and the university created and implemented a new method of on-site training. The transfer students who joined in the 2020 academic year as third-year undergraduate students began to take online classes in May. They did not have the opportunity to receive any face-to-face practical training, such as training on nursing techniques. Meanwhile, the on-site training for the basic practice had been canceled. Thus, this particular practical training was their first on-site training. In this practical training, groups of five students were each assigned to a single patient. A hybrid practical training program was created and implemented by combining on-site training and on-campus training in role-playing. Taking care of patients as a team was an effective lesson based on actual practice. However, both the difficulty of sharing information and issues related to group dynamics were challenges for beginner students.

**[Key words]** Corona-Virus Disease-2019 (COVID-19), Practical Training,  
Accelerated Bachelor of Science in Nursing program,  
Practicum in Gerontological Nursing

### [要 旨]

2017年度より開設された聖路加国際大学3年次学士編入コースによる老年看護学は、従来の成人看護学と老年看護学を統合した「成人・老年看護学」を適用し、教授している。新型コロナウイルス感染症下の2020年度後期の老年看護学実習は、実習病院による実習生の受け入れが病棟滞在時間などの一定の条件下で可能となり、実習病院と大学とで新たな臨地実習の方法を検討して実施した。2020年度に入学した3年

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science  
2) 川崎市立井田病院看護部・Kawasaki Municipal Ida Hospital, Department of Nursing

次学士編入生は、オンラインでの授業が5月から開講になり、看護技術などの演習授業を対面で受ける機会がなかった。加えて、基礎看護学実習は臨地実習が中止となったため、本実習が初めての臨地実習となった。本実習では、5人の学生グループで1人の患者を担当し、臨地実習とロールプレイによる学内実習を組み合わせたハイブリッド型実習を構築し展開した。チームで患者を受け持つ体制は実践に基づく効果的な実習となったが、初学者には情報共有することの難しさと、グループダイナミクスのあり方が課題となった。

〔キーワード〕 新型コロナウイルス感染症、臨地実習、学士編入制度、老年看護学実習

## I. 緒言

2020年、世界的規模による新型コロナウイルス感染症の大流行は人類の生活を大きく変え、看護教育を取り巻く状況も、通常の対面による教育方法ではなく、画面越しによるオンライン授業へと変革せざるを得なくなった。学びを止めずに推進していくためにも、臨地実習の代替実習を多くの大学が実施し、看護の対象者と遠隔でのコミュニケーションや、臨地実習と学内実習を組み合わせるなど、さまざまな工夫がなされてきた<sup>1)</sup>。

本稿では、3年次学士編入3年生（以下、学士3年生）を対象とした、2020年度後期の老年看護学実習に焦点をあて、基礎看護学実習を臨地にて実施できなかった学生に対して、感染予防対策に努めながら、臨地実習と学内実習を組み合わせたハイブリッド型の老年看護学実習を、臨床指導者とともにどのように構築し展開したのかを報告する。また今後の課題についても述べる。

## II. 「学士 老年看護学実習」科目内の位置づけ

2017年度より聖路加国際大学では、看護学以外の学士号を取得したものを対象とする3年次学士編入制度を開設している。本制度のカリキュラムの特徴は、看護の専門的知識と技術を2年間という短期間で効果的な学修をしていくため、領域を超えて統合した授業と実習が展開され<sup>2)</sup>、老年看護学にまつわる科目は、成人看護学（急性期・慢性期）と統合した「成人・老年看護学（大人への看護）」として位置づけ、22のコンピテンシーをもとに教授している。

成人・老年看護学の講義・演習は、例年9月から10月中旬までの期間に開講され、11月より急性期看護学実習（2単位）、慢性期看護学実習（2単位）、老年看護学実習（3単位）を統合した実習を展開している。

## III. 「学士 老年看護学実習」の実施方法

実習病院は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、臨地実習の受け入れを中止していた。2020年9月

に実習病院から、「11月1日より一定の条件下で臨地実習の受け入れを再開する。」との連絡を受けた。そこで、一定の条件下でどのような実習を行うことにより本科目の実習目標である「成人から老年期にあり、健康障害（健康問題）をもちながら、医療施設、介護保険等施設および在宅等の様々な場で療養生活をしている人・家族を多角的、包括的にとらえ、最適な健康状態となるように、地域包括的ケアシステム及び学際的ケアチームにおける協働と看護の役割に対する理解を深め、People Centered Careをふまえた看護が実践できる。」を達成できるのか、を検討するため、本学老年看護学教員（単位認定者）と3年次学士編入担当教員とで同月下旬（実習の約1か月半前）、実習病院を訪問した。そして、老年看護学の教員が提案した本実習の方法は、臨地実習と学内実習を組み合わせたハイブリッド型実習とし、グループで1人の患者を受け持ち、看護過程を展開する、という方法であった。同席していた実習病院の副看護部長、実習病棟の看護師長、主任の賛同が得られたため、具体的な運営方法を話し合い、学生の臨地実習のスケジュール表（図1）と、老年看護学実習のスケジュール表（図2）を作成した。

### 1. ハイブリッド型「学士 老年看護学実習」の検討

実習病院が提示した一定の条件とは、①実習時間は1日4時間以内、②1病棟で受け入れる実習生を1日3人までとする、であった。実習時間は食事介助やカンファレンスの時間などを加味して、午前は8:30から12:30までとし、午後は12:00から16:00までを設定した。実習形態は10人の学生を2グループに分け、受け持ち患者を2名選定して1グループ（5人）で患者1名を受け持ち、看護過程を展開することとした。患者の選定については、学生は新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため基礎看護学実習に出られず、初めての臨地実習となるという背景があるため、コミュニケーションが比較的取り易い、バルンカテーテルや点滴などをされている患者を選定依頼した。

受け持ち患者の情報は、臨地実習直前の10月29日午前中に学士編入の教員が実習病棟を訪問して情報収集し、

	月日	10/30	10/31	11/1	11/2	11/3	11/4	11/5	11/6	11/7	11/8	11/9	11/10	11/11	11/12	11/13	
	学生No.	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	
グループ1	①	学内オリエンテーション	休日	休日	臨地	祝日	学内	学内	学内	休日	休日	学内	臨地	学内	学内	最終カンファレンス	
	②				学内		学内	学内	臨地			学内	学内	学内			
	③				学内		学内	学内	臨地			学内	学内	学内			
	④				学内		学内	学内	臨地			学内	学内	学内			
	⑤				学内		学内	学内	臨地			学内	学内	学内			
グループ2	⑥		臨地	休日	休日	学内	祝日	学内	学内	学内	休日	休日	学内	臨地	学内		学内
	⑦		学内			学内		学内	臨地	学内			学内	学内			
	⑧		学内			学内		学内	臨地	学内			学内	学内			
	⑨		学内			学内		学内	臨地	学内			学内	学内			
	⑩		学内			学内		学内	臨地	学内			学内	学内			

臨地；臨地実習，学内；学内実習

図1. 2グループに分けた学生の臨地実習スケジュール

・対面による従来型の実習スケジュール

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
1週目	・オリエンテーション ・情報収集	・情報収集 ・アセスメント ・患者への援助	・情報収集 ・アセスメント ・患者への援助	・看護課題抽出と焦点化 ・患者への援助	・看護の方向性確認 ・患者への援助 ・中間カンファレンス
	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
2週目	・患者への援助 ・看護課題 ・優先順位確認 ・看護計画立案	・患者への援助 ・看護計画実施 ・評価・修正	・患者への援助 ・看護計画実施 ・評価・修正	・患者への援助 ・看護計画実施 ・評価・修正	・患者への援助 ・最終カンファレンス



・ハイブリッド型実習スケジュール

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
臨地実習 (1週目)	・事前学習：事例カルテから情報収集	・情報収集：カルテ・患者とコミュニケーション ・実習指導者からの情報提供および指導 ・情報共有および学内実習の学生とのディスカッション ・翌日の情報収集項目の確認と実習目標の立案			
学内実習 (1週目)		・各自自己学習内容の確認をグループ間で実施 ・アセスメントする上で足りない情報は何かについてのディスカッション ・臨地実習の学生から情報を得てグループ内で共有 ・翌日の情報収集項目の確認と実習目標の立案			
	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
臨地実習 (2週目)	・朝もしくは前日までにグループで実習目標と看護計画立案 ・グループで立案した看護計画の実践 ・学内にて受け持ち患者の反応および実習指導者によるフィードバックをもとに評価	・朝もしくは前日までにグループで実習目標と看護計画立案 ・グループで立案した看護計画の実践 ・学内にて受け持ち患者の反応及び実習指導者によるフィードバックをもとに評価			最終カンファレンス
学内実習 (2週目)		・朝もしくは前日までにグループで実習目標と看護計画立案 ・グループで立案した看護計画を学内にてロールプレイを通して実践 ・患者の状況設定を教員側で行う			

図2. 対面による従来型の実習からハイブリッド型実習への転換

学生に提示した。

実習期間の第1週(11/2~11/7)は午前(8:30から12:30)に臨地実習を行い、第2週(11/10~11/14)は午後(12:00から16:00まで)に臨地実習を行うこととし、患者の生活の変化を捉えられ、病棟のカンファレンスに参加できるよう時間設定を行った。

学生は、臨地実習、学内実習を問わず実習行動計画(実習目標、実習計画、報告を含む)を毎日作成し、持参した。

学生は健康管理をした上で、物理的距離を保ちながら、検温、車椅子移送、清潔ケアなどを、実習指導者もしくは看護師の見守りの元で見学及び実施する取り決めを行っ

た。実習病院のオリエンテーションについては、事前に看護部に相談し、病院の紹介はホームページの動画を用い、病棟オリエンテーションは事前に病棟紹介と一日の流れの資料を預かり、いずれも学内で実施することになった。

## 2. 感染予防対策

### 1) 実習病院

事前に実習病院に本学の「実習における COVID-19 感染防止対策資料」を提出し、基準となる体温や症状などの内容確認を依頼した。実習病院が指示した感染予防対策は、以下の7点であった。1点目は、実習学生は実習開始14日前（10月19日月曜日）より、健康観察記録（本学所定書式）への記載を開始し、本記録のコピーを実習最終日に病院に提出すること、2点目は実習中、サージカルマスクを常に装着し絶対に外さないこと、3点目は、手指消毒剤を携帯し、ケア前後や物品に触れた際は必ず手指消毒を行うこと、4点目は、受け持ち患者もマスクを装着した状態で援助を行うこと、5点目は、病院内で食事をとらないこと、6点目は、更衣室から速やかに退出すること、7点目は、ロッカーの荷物はその都度持ち帰ることであった。これらを学生にアナウンスし、実習中もその都度教員が確認を行った。

### 2) 聖路加国際大学

本学の「実習前／中フロー図」に従い、実習開始14日前（10月19日月曜日）より本学の書式を用いて健康観察を開始し、実習期間中は継続して健康観察を実施した。体調不良時は、ためらわずに欠席するように伝えた。また、臨地実習当日、実習前14日間の行動確認表を病院に提出した。また、学生には、事前に青色のサージカルマスク1人10枚、ポシエットつき手指消毒剤を配布し、実習病棟に入る直前に、サージカルマスクを新しいものに交換するように伝えた。

学内実習では、オンラインで自宅から参加を可能とし、学内に登校する場合は、必ず教室の窓を2か所開けて換気した状態で実習を行うこと、ディスカッション時はソーシャルディスタンスを保つこと、サージカルマスクを外さないこととした。また、食事は一方向に座り、黙って食べることを徹底した。演習室の実習では、手指消毒と換気、ならびにソーシャルディスタンスを行った。

## IV. ハイブリッド型「学士 老年看護学実習」の実践

本科目は、3年次学士編入生が入学1年目の後期に実施される実習である。新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、「コミュニケーション実習」、「日常生活援助

実習」、「看護展開論実習」がオンライン実習となったため、「学士 老年看護学実習」は、学生にとって初めての臨地実習であった。

### 1. 学士 老年看護学実習の実施

#### 1) 実習オリエンテーション

実習オリエンテーションでは、ハイブリッド実習の日程と、臨地実習の日程を提示した。臨地実習の学生は、看護師のシャドーイングを通してケアを行うこと、および見学に入る時は、なぜ援助が必要であるのかを考え、実習指導者に伝えること、バイタルサインズ測定などの観察や車椅子移送、清潔ケア、ならびに排泄ケア等の実施は、看護師見守りの元で実施することを説明した。臨地実習では、報告、連絡、相談を必ず行い、実習病棟のスタッフは皆、学生が初めての臨地実習であることを周知しているので、安心して実習に取り組むことを伝えた。

受け持ち患者の情報提供は、電子カルテ形式のフォーマットを表計算処理ソフトウェアで作成した「事例カルテ」に過去1週間の熱型や、実習開始日直近の基本情報を入力したものを提示した。実習期間中は事例カルテに情報を加筆せず、学生の情報収集を実習記録に加筆していくことにより共有した。また、質問については、manabaで共有できるようにした。

#### 2) 臨地実習

臨地実習では、学生が実習指導者に実習日の看護目標と一日の行動計画を発表した。第1週目は、病棟という環境に慣れること、及び患者とのコミュニケーションに重点を置いて実施した。学生は計画発表時に、実習指導者から夜勤帯の情報を得るなどして指導を受け、足りない情報や必要な情報を電子カルテや、観察により収集して追加し、アセスメントをしていた。教員は、学生がどのような情報をなぜ必要と考えているのか話を聞き、ベッドサイドに行き指導を行った。

臨地実習終了後、臨地実習の学生は学内実習をしている学生と合流し、その日の患者の様子や得られた情報の共有とアセスメント、関連図の作成と看護課題の抽出、看護計画の立案をグループ内で検討し、翌日の実習目標を考えた。そして、翌日の臨地実習の学生に必要な情報収集項目と看護計画を引き継いでいった。

第1週目に看護課題の抽出と看護計画を作成し、第2週目に、計画した看護援助を実習指導者もしくは、日々の担当看護師、ならびに教員の立ち合いの下で実施した。教員は、学内実習担当と、臨地実習担当に分かれて、一貫して同じ担当をし、毎日綿密に情報交換と指導の方向性の確認を行い、臨地実習と学内実習の学生が一致した指導を受けられるようにした。

### 3) 学内実習

学内実習では、第1週目は、個人で学習を進めながら情報のアセスメントと関連図の作成、看護課題の抽出までを作成した。午前中は個人学習を主としたが、午後からは臨地実習をした学生からの情報共有とディスカッションを通してチームで患者を受け持っていることを意識させ、情報共有だけでなく、アセスメントの視点や看護課題の抽出、看護の方向性等を確認しあう学習とした。

第2週目には、グループで立案した看護計画を演習室でロールプレイにて実施した。グループごとに臨地実習以外のメンバーでペアを作り、患者役は高齢者疑似体験セットを装着し、臨地実習で理解できなかった高齢者の反応の理解を深められるように、また看護師役は看護計画で実施する看護技術の演習を目的に行った。学内実習2週目では、臨地実習で受け持ち患者に接した学生が、患者の状況をグループメンバーに共有し、患者の個別性にあわせた援助を検討することができていたため、学内実習7日目以降は、患者の体調の良し悪しを演習直前に教員が設定し、患者の状況にあった看護が提供できるよう工夫をした。

### 4) まとめのカンファレンス

まとめのカンファレンスは、学生全員が白衣を着用し、ソーシャルディスタンスを保ち講義室に集合し、実習病院とオンラインで結び、実習指導者1名と教員2名が参加して実施した。

学生からは、1人5分で実習における学びと実習目標の達成度について発表し、情報収集と伝達の難しさが語られていた。また、実習指導者から、看護介入で良かったところ、看護介入の改善点、老年看護学実習の全体評価、そして今後の学習に向けた意見が述べられた。

オンラインであったが、実習指導者が参加することにより、患者の状況や反応にもとづく判断を聞くことができ、学生は現象をさらに深く理解することができたと考えられる。

## V. 実習指導者と教員での実習の振り返り

2021年3月に実習病院と本学老年看護学の教員とで、「学士 老年看護学実習」の振り返りをオンラインで開催し、実習目標の達成度や教育上の課題、指導体制などについて振り返りを実施した。

### 1. 老年看護学実習の実習目標の達成度について

老年看護学実習の実習目標達成度について、教員からおおむね達成できたと考えていることを報告した。学生は、5人で1人の患者を受け持ち、臨地実習と学内実習に分かれ、情報共有しながら看護過程を展開し、実習受

け入れ基準を遵守して、学生は臨地実習を2回経験することができた。実習病院が限られた時間の中でケアやカンファレンスの見学の機会を調整、提供したことにより、学生は疾患に偏りがちな思考から、生活を支える看護について思考できるようになり、生活と医療を支えるという高齢者への看護の役割や、高齢者とのコミュニケーション技術を学習することができた。また、実習後に実施した学生との面談では、自己課題（言語化が苦手など）も見出ししていた。

また、ハイブリッド型実習のメリットは、学生同士による意見交換で、必要な情報やアセスメントを多角的に学べていたため、ある学生は気が付かなかった現象についても情報が得られ、アセスメントができたことが挙げられる。また、情報共有をする時に、自分の解釈を入れることなく、共通言語を用いて情報を伝えるという訓練が可能となった。加えて、通常の実習とは開始時刻が臨地実習と学内実習とは異なるため、思考する時間が確保できたことが挙げられた。そして、直接的なケアを通して、患者の表情や言動を瞬時に読み取りながらコミュニケーションを行っていくという臨地実習ならではの体験をすることができた。一方、デメリットとしては、臨地実習の学生が、個々に関心のある情報や目につきやすい現象、そして情報に基づかない主観を学内実習の学生に伝えている傾向がみられた。このため情報が正確に伝わらず、関連図や看護課題の抽出に影響があった。

## 2. 教育上の課題について

### 1) 実習病院

臨床では、患者をチームでケアしているため、グループでひとりの患者を受け持つ実習方法は実践的である。しかし、実習期間中の病棟での実習が、各グループに属している学生1人につき2回であり、時間が空くことや、学生が毎日変わることから、「アドバイスが学生に十分に伝わっているか不安」という実習指導者からの声があった。実際、グループ1では、実習指導者は疾患をもつ生活者としての視点で自宅退院に向けた介入に焦点をあて指導していたが、学生は、患者の変化が把握しづらかったためか、心理面に焦点をあてた介入を計画していた。一方、グループ2では、実習指導者の指導も伝わっていると考えられ、継続した援助ができていた。

この実習方法は、グループ内で情報収集とアセスメントを共有しながら看護過程を展開するため、グループダイナミクスが重要であると感じた。実習前にチームとは何か、について学ぶ機会や、学内実習の内容を実習指導者が把握する機会があるとさらに実践的な実習になると思う。これからも実習を通して、長期療養をしている患者をどのように支えていくのかについて、共に考えていきたいと思う。

## 2) 大 学

学生が収集した受け持ち患者の情報が、主観的かつ自己解釈して同じグループの学生に伝達され、情報を正確にとらえて解釈することが難しい場面があり、初学者による情報共有の難しさや、アセスメントの視点の異なりがあった。しかし臨地実習での疑問を学内実習に反映させ、思考の時間を設けながらグループでディスカッションできたことで、アセスメントする上での情報を得る視点や看護課題の導き方など、メンバー間で理解を深めて看護過程を展開できた場面などが見られた。

## 3. 指導体制について

### 1) 実習病院

実習期間の前半で患者の情報共有をする場があると良い。実習指導者が学生に伝えたことが、学生に伝わっていないケースが見られた。このため、実習指導者も学生に伝えたことが伝わっているかを確認する場があると良いと考えられる。

### 2) 大 学

今年度は日程の都合上、実習指導者も含めた中間カンファレンスを設けることができなかった。看護の方向性や翌週の実習に向けて、臨地実習での指導が学生に伝わっているのか確認する機会が必要と考えられ、オンラインによる中間カンファレンスを設けるべきであった。また、学内実習担当教員と臨地実習担当教員とで情報共有を密に行い、実習を進めたが、学内実習担当教員は、学内実習の担当のみとするのではなく、学内実習と臨地実習とを交互に担当する必要性があったと考える。そのような体制にすることで、教員間のリフレクションにもつながり、学生の思考過程と学習状況を深く理解することができ、さらに学生への指導方法を検討する機会にもつなが

ると考えられる。

## VI. 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、対人の接触が避けられない臨地実習の遂行が困難となる中で、老年看護学実習では、グループで受け持ち患者1名を担当し、臨地実習と学内実習を組み合わせたハイブリッド型実習を実施した。今後も新型コロナウイルス感染症の収束の見通しは立っていない。対面での実習が制限される中で、実施可能な方策を実習病院と大学とで検討し、協働しながら看護学生の育成を行っていくことが重要であると考えられる。

## 謝 辞

「学士 老年看護学実習」において、実習にご協力くださったすべての皆様に深謝申し上げます。新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続く中、看護学生の育成についてご検討いただきましたこと、心より感謝しております。ありがとうございました。

## 引用文献

- 1) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について. 令和3年(2021年)6月8日 [Internet]. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext\\_00002.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00002.html) [参照 2021-10-08]
- 2) 森田誠子, 猪飼やす子, 小布施未佳ほか. 実践報告: 聖路加国際大学3年次学士編入制度-開始3年目を迎えて-. 聖路加国際大学紀要. 2020;6:70-5.